

山雲子と遊女評判記

陳*
羿秀

はじめに

山雲子は本名坂内直頼、近世前期の著述家である。正保三年（一六四六）生まれで、享保二年（一七一七）逝去。別号に如是相・葉山之隠士などがある。天和三年（一六八三）刊『和歌詞林抄』・貞享元年（一六八四）『有職袖中抄』・元禄四年（一六九二）『説法用歌集診註』など、数々の注釈書や診解書を著した。近年、さらに多くの著作が山雲子作である可能性が指摘されはじめた。先に筆者は拙稿『近世文芸』九九号「山雲子の著作について」において、延宝九年（一六八二）刊『名女情比』、天和二年（一六八二）刊『好色袖鑑』及び貞享四年（一六八七）成立の『男色十寸鏡』は山雲子の手による作の可能性を明らかにした。本稿では、加えて『名女情比』と同じく延宝九年（一六八二）刊のいくつかの遊女評判記について、その可能性を探りたいと思う。

『都風俗鑑』（半紙本四卷四冊・版元不詳）は、延宝九年（一六八二）三月刊の遊女評判記である。外題に「都風俗鑑」、内題に「都色欲大全」、柱記に「笑大全」とある。巻一では、大尽をはじめとする買手側の諸相、巻二は腰元など女性奉公人の風俗を生きたききと描き出している。また巻三は若衆の評判及びその相手側の女、若後家の様子などを描写し、巻四は風呂屋女・茶屋女などの風俗の女性の有様などを述べている。総じて作者は当時の都の風俗遊興を冷静な目で観察し、写し出しているといえる。その風俗描写は後の西鶴の浮世草子（『好色一代女』など）に影響を与えたり、西鶴と類似した着想を持っている事は、すでに先行研究によって明らかになっている。

その作者について、木村仙秀氏は『稀書複製刊行稀書解説』において、次のように指摘されている。

作者は序文に「花洛の遊民何之何氏拙者書」跋文に「我友何氏が考學のひまくに当世男女の事をつらねて書たり」とありて、例の如くその誰なるを知らず、されどその書相画風刊年の『朱雀遠目鏡』（延宝九年正月）、『同諸分鑑』（同年四月）と同じく、前者は評判記、後者は諸分を記せるにて共に遊女物なるに、その中間

の三月に若女両道の内幕を描寫せるは、或は同一人の所業ならん歟。木村氏は『朱雀遠目鏡』『都風俗鑑』『朱雀諸分鑑』の三作は、その筆跡や挿絵の類似性などから、遊女評判記の三部作だと考えており、またそれは同一人物による作だと推測されているが、三作の内容が具体的にどのよう似通っているのかは言及されていない。

この三部作は、塩村耕氏が「西鶴同時代の隠者作家 山雲子の新たに判明した著述」^④において山雲子作であると明らかにした。好色本の貞享三年（一六八六）刊『好色訓蒙図彙』・貞享四年（一六八七）刊『好色貝合』と内容的に酷似している。

本論では、具体的に『朱雀遠目鏡』『都風俗鑑』『朱雀諸分鑑』と『好色訓蒙図彙』『好色貝合』がどのように関わっているかを明らかにし、前三者は同じ作者が著したものであることを検証し、それはいずれも山雲子の著作である可能性を検討したい。

一 遊興論の共通性について

『朱雀遠目鏡』（延宝九年（一六八二）正月刊・半紙本二冊・版元不詳）は島原遊廓の太夫・天神を松の部と梅の部に分けて品定めした遊女評判記であり、内容的には明暦元年（一六五五）刊の『桃源集』を模範としたもので、現存する数少ない島原遊廓の遊女評判記の一つである。その「序」と『都風俗鑑』に見られる遊興論について少し検討を加えてみる。

まず、『朱雀遠目鏡』の「序」^⑤では、

されば權花一朝の詠なきにしもあらざれば。それくに別たる品に任て金銀をなげうてば。たつた今までふづまりなる。うちのおかたとむかひるたりし鬱気もはれ。はげしかれとハいのらざりし。名も初瀬の山の神にひきかえて。善女人と罵

〔キーワード〕 山雲子／遊女評判記／『都風俗鑑』／『朱雀遠目鏡』／『朱雀諸分鑑』

*平成二十三年度生 比較社会文化学専攻

「海老の枕をかはし。種々雑多の私語さくごハいへた事にハあらず。『都風俗鑑』の卷二一四「女を仕立てる手入并奉公の品」⁽⁶⁾では、

とりぐ、しなぐにて侍れば、高き有、下直成有。貴賤、僧俗それくのもてあそび、御心任せにして、更に手を尽く事侍ねば、品のわかれたるに任せて、錢銀を費やす時、鴛鴦の契り、海老の濡れ、比翼の諸分、連理の以爲おもはく、ひとつも乏しき事なし。

両作品とも、都の遊興では皆それぞれ身の丈に合う遊びをし、遊女などと枕を交わす当時の京都の風俗を描いている。傍線部で示したように、『朱雀遠目鏡』の「別たる品に任て」は『都風俗鑑』の「品のわかれたるに任せて」と似たような表現に見られる。また、『朱雀遠目鏡』の「善女人と鴛鴦のふとんの上に。海老の枕をかはし」と『都風俗鑑』の「鴛鴦の契り、海老の濡れ」の表現に類似性が認められるのである。両作とも「偕老」という単語の当て字に「海老」を使ったのも特徴といえよう。

次に、『朱雀遠目鏡』の「序」に、一番尊ぶべき大尽の姿について、
只一向にかたよらず。中庸の道なる傾城遊興こそ。たのしみ長くわけもたちて。御敵はいふに不及。宿屋の亭主出口の茶屋。太鼓おろせにいたるまで。ながくてほそき御めをかけさせられ。福大臣様とたうとむべきもの也。

とあるように、遊廓において、行き過ぎた遊び方は宜しくない事であり、遊廓の上から下までバランスよく末永く面倒を見ることが出来る大尽こそが、皆に慕われるものであるとしている。

一方、『都風俗鑑』の卷一三「大臣嶋原に來ての諸分并大臣に上中下有事」では、つねぐも拳屋、太鼓、又は遣手、禿、拳屋の下、出口の茶屋、御に至るまでも、それくに物を取らせ、又は酒盛の折から、折に触れては宿屋の女房、親父、遣手に至までも座敷に召出し、興に乗じて露を打つ、又上郎には折々の衣装を取らせ、又は借銀有には、済して取らす。是分知りの御大尽、諸人の尊ぶ事、

『朱雀遠目鏡』のように作者が良しとする遊び方についてこそ言及していないものの、やや表現を変えているが、遊廓の下々まで手が届く大尽こそ「尊ぶべき大尽」の有るべき姿だと考えている点は『朱雀遠目鏡』と共通しているのである。

それに対して、野暮な買手の様子について、『朱雀遠目鏡』の「序」では、
跡前の首尾そろはぬわらうハ。夏のむしのとんで火に入がごとし。其さかん成内こそ全盛にかゝやくべけれ。只夏の田の稲のとの。ちらくとしてあがり鯨になる事ハ。是大きなはまりさうなり。

とあり、これに対して、『都風俗鑑』の卷一四「月なる買手の事」でも、

片隠かたかくにては嬉しがりて、結句笑物にして褒めそやせば、彼の若公機嫌わかうに乗じて、彼等が馬鹿慥慥を嬉しがりて、滅多と使ひ捨て、程なくあがり鯨と成なり。是を吝き大臣と丸じ合れば、よき物をと思ふもあり。又我こそ分知り顔に座配立てして、又は余情の過を言ひ散し、大き成嵌まりになりて、振つて振り付けらるゝもあり。

とあるように、両者とも野暮な買手は、後先を考えずに遊女に入れ込んでしまった結果、お金を使い果ててしまい、「あがり鯨」になると述べている。

野暮な買手については、『朱雀遠目鏡』と『都風俗鑑』のほかに、『朱雀諸分鑑』と『好色貝合』にも言及がある。

『朱雀諸分鑑』（延宝九年（一六八一）四月刊・半紙本二冊・丸屋源兵衛）は遊女評判記である。遊女評判記物の「諸分物」に属するものであり、当時の島原遊廓の心得を記したものである。本書を出版した書肆は丸屋源兵衛であるが、それについて、朝倉治彦氏の『未刊仮名草子集研究（一）』の「解説」に、

「名女情比」の序文に、『落葉堂好色軒に筆をとり侍ぬ』とある。落葉は洛陽であらう。「好色袖鑑」の序文には、『花洛好色堂何の何氏』とある。両者互ひに近似してゐる所がある。読み比べると、同一作者と思はれるふしがある。（中略）遊女評判記たる「朱雀諸分鑑」を問に挟んで、前に「名女情比」、後に「好色袖鑑」、

これは丸屋といふ一書肆の關係した出版物として見ると、甚だ興味深い。とあり、『名女情比』『好色袖鑑』は同一作者によるものである可能性、そして、『名女情比』『朱雀諸分鑑』『好色袖鑑』の三作とも丸屋源兵衛による出版であることについて指摘されている。『名女情比』『好色袖鑑』の二作とも、実は山雲子による作である可能性は前掲の『近世文芸』においてすでに検討したが、この二作と同じ書肆から出された『朱雀諸分鑑』も同様に山雲子作の可能性があると思われる。

一方、『好色貝合』（貞享四年（一六八七）九月刊・小本二冊・清兵衛・三右衛門）は『好色訓蒙図彙』の続編で、本編と同じように当時の都の性風俗を描写した好色物である。『朱雀諸分鑑』と『好色貝合』は遊廓の遊び及び野暮な買手について、文章表現と

いい、内容といい、非常に近似した見解が見られる。『朱雀諸分鑑』の「若葉露 女郎柄にぎる心もち」⁽⁸⁾では、

女郎のあそび月花のあそびにかはる事なし。名高き名所の月花は天下の物で。名所にぬしはござんせぬ。花のさかり月のくまなき比。たれなりときまゝにながむ

るにたれふぜくものもなし。また詠る人もうつくしおもしろやと思ひながらも心はとまらず。まつそのごとく女郎は名所の月花なり。けふかたさまにあふかと思へば。あすはよその枕をかはし。千万人のもてあそびと成物をしりながら。いつしか打忘れて。我物と心をとどめさんすさかいで。さまぐの事がおこります。もとより女郎はすれのかはなれは。形にはよしなき事をも。しさいらしくかぎり。心に気もなくおもはぬ事をも。口には色節をやりて偽ます。つとめのならひ。たい躰は此とをりでござんす実の分はかくべつのさた。かやうの事はみえずいていれども。そこぬなく心をうつさんするゆへ。其まゝ男の心をくみて。うち甲がたてさまぐのてをうちます。第一女郎にほれるからおこつて。うき世に野火がたえませぬ。いかにうつくしきとて。むしやうにほれる物ではなし。

一方、『好色貝合』の「野火」において、

夫女郎は、名所の花と思ふべし。吉野ゝ花は、世界の人もあそび。見に来る程に、此花の主は、世界の人も。女郎さのごとし。それじや物を、すこしなじみたる女郎も、うちとけ顔なれば、はや我ものじやと思ふ也。是からおこつてほどさるゝ、是一つ。又、むしやうにぜいにでる、是一つ。くちを過して、女郎に詞じちとらるゝ、是一つ。かひながらも、女郎のためにならぬかひやう、是一つ。やうきにてそゝる、是一つ。酒を吞て、から口のそろはぬ、是一つ。これらのたぐひ、女郎のきにあはぬ重々。しかあれば、何とて実になるべきや。かひながらも、皆つもられどをしなり。

とある。『朱雀諸分鑑』では、遊女のことを「名所の月花」に準えて、それを「天下の物」とあると言っている。その上、傍線部にあるように、天下の物である遊女に惚れすぎると、身の破綻を来たし逆に遊女に騙されてしまい、それは野暮の行為であると論している。他方、『好色貝合』は、『朱雀諸分鑑』と異なり、傍線部分に示されているように、遊女を「名所の花」に喩え、その花の主は「世界の人」であるとしている。しかし、『朱雀諸分鑑』と同じように、「名所の花」である遊女を我が物のように扱おうとすると、結局、傍線部①と②に見られるように、身の破綻を招いてしまう。それは野暮な遊び方であると諷めている。

このように、『朱雀諸分鑑』の「名所の月花」と『好色貝合』の「名所の花」は文言の相違こそあるものの、遊女を独り占めしようとしたり、それに惚れすぎたりするのは野暮な行いであると論じている点においては一致していると思われる。

二 性風俗の描写をめぐる

前節において、『都風俗鑑』と『朱雀遠目鏡』、また『好色貝合』と『朱雀諸分鑑』の遊興論及び粹大尺、野暮に対する表現の類似性と考え方の共通性について言及した。

本節では、性風俗の描写や、当時の都の女性が奉公先に見立てられるときの様子などについて、『都風俗鑑』と『好色訓蒙図彙』『好色貝合』の間に似通った記述が見受けられることを指摘したい。

まず、『都風俗鑑』の卷一八「北向き狂ひの事」に見られる「北向」について、抑此北向きと申は浮世のうんざいの集りなれば、其の様中く詞には述べがたし。無性に臭そうに思はるゝなり。或は片目、蛇皮面、杓子、出額、畚尻、又は脚の片足短きなどなり。(中略) 覗きをくれし男、目もあやに打笑みて、口一杯に彼煙管を押し込み、煙がちに吹なし、どふでのかうでのと以為たての意気付く。蓼食虫の我からなれど、さてもよき物食ひかなと呆れて通るばかりなり。

とあり、他方『好色貝合』の「北向大臣」では、「北向」について、

大木を伐たふしたやうに、五躰をやりちがえ、きせる横ぐはへにして。義太夫がりをむりぶしにやり。(中略) 或は、真黒な背中をいだし、膏肓のふたをさせてあるもあり。又は、はんじ物の団をいけぬ思案して、ひやうばんする所もあり、蓼くふ虫の我から。迷ふ心のはかなくも。此女とさへ心中だて也。五十二類の衆生なれば。物喰も又、かはるならし。

とある。『都風俗鑑』では傍線部で示されているように、「北向」の「片目、蛇皮面」などのような見た目と「目もあやに打笑みて、口一杯に彼煙管を押し込み、煙がちに吹なし」のような、男を誘惑する仕草を記し、『好色貝合』でも、「北向」の「大木を伐たふしたやうに、五躰をやりちがえ、きせる横ぐはへにして」のような行動を描写している。文言は相違するが、両作品とも私娼の最底辺にある「北向」を下品な遊女として捉えている。その上、両者とも作者が「蓼食虫」と自称しているところが共通している。ただし、両作品には違いはあり、『好色貝合』において、作者は「北向」をいやらしいものだと思ひながらも、結局迷い心から「北向」と心中立てしたが、『都風俗鑑』においては、作者は結局「北向」のあまりの下品さを我慢できず、ただそれを傍観しているのみである。

次に、『都風俗鑑』では、「北向」の身の回りについて、

破れたる暖簾の隙より見れば、摺鉢の目の潰れたるのや、土塗桶の蓋なんどに火を入れて、鐘鑄の勸進に取らせさうなる拉げ煙管に、羅字はひた物損ね次第に切り縮め、

とあり、その「北向」のみすばらしい身の回りに関する類似した描写は、『好色訓蒙図彙』にも窺える。

『好色訓蒙図彙』（貞享三年（一六八六）閏三月刊・半紙本三冊・銅駝坊三右衛門・高辻昌陽軒）は、当時の風俗、言語などを絵と注解によつて記した好色物である。本書の「北向」では、

青暖帟のやぶれよりみわたせば、万おこりきらひ給ひて、めげ火桶ひさげ、きせる紙くずをしるがえて、はかりずみをとゝのへさせ給ふ也。

とあり、『都風俗鑑』の「破れたる暖簾の隙より見れば」と『好色訓蒙図彙』の「青暖のやぶれよりみわたせば」は、似通っている。さらに、「北向」の生活の貧しさに関しては、『好色訓蒙図彙』では文章表現が異なるものの、『都風俗鑑』と共通した描写が見られる。『都風俗鑑』では、「北向」が「摺鉢の目の潰れたる」のような破損した挿鉢などをそのまま使っている。『好色訓蒙図彙』においても、「北向」が「めげ火桶ひさげ、きせる紙くず」と壊れた火桶と鬻げ、キセルの紙屑を金に変えて炭を調達する様子が描かれているなど、両作品とも「北向」の浪費を嫌う性格とその佻しい生活を活写している。

次に、『都風俗鑑』の巻二一四「女を仕立てる手入并奉公の品」に見られる「奉公女」についてである。これは当時の都の親が娘をいい値段で売るための必死さや、女性が奉公先の鑑定を受けているときの苦勞などを描いている。さらに、その文章や内容は『好色訓蒙図彙』の「妾」や『好色貝合』の「浮女」とも酷似している。

『都風俗鑑』の巻二一四「女を仕立てる手入并奉公の品」では、もとよりそれ者の人置嬢、「こちにまかしやれ」と手に取やうに請合、諸方を駆け回して、入口を聞出し、或は乗物や賀籠に乗せ、雇腰元、雇下女、或は目見えの折からは、損料の借小袖にて、金仏のごとく莊嚴して、目利に見えらるゝなり。又駕籠にさへ乗事のならぬは、被を着て、目の腐れた白髪まじりの、嬢などを雇ひ出して連るゝも有、又は青道心の尼に引かされて行もあり。其さまゞくにてはそれゝの芸をさせて見る。おかしき事を言ひては笑はせて笑顔を見、立たせでは姿、歩きぶり、居ずまひ、それゝ細かなる目利にて、或は地肌、染焼さまでを目利に当て、又は今宵は先爰にとて、塗砥にかけても様子をこゝろみらるゝ

なり。（中略）縁遠なる娘達は、彼嬢に引き回され、目利にあふ有様、飛騨や、仙台、四国、北国の馬口勞が駒を見立てるに異ならず。

とあり、これに対して、『好色訓蒙図彙』の「妾」では、

我もくと女をしたつる、もとより色を立程のわけなれば、氏種性のさたはけもなし、それゝのきもいり、人をき口鼻にふるれば、てんぐにひひ伝て、幾千人といふ数をしらず、つれて来る也、彼女内ある時は、顔ばかりきよろくと彩色して、首から下は産女のやうにみえしが、すはや此子が、注文にあひたり、捨銀これゝしてやらうと、内には阿爺口鼻、外には人置、手に取やうに悦び、かどていはへとて、壬生の本尊様のおかゞみいたゞき、生沙に願たてゝ、一日ばれのかり小袖、対の駕籠かきやとひ、下女あたりもかゝやく有様也、目利にみえられに行に、わらはせて笑顔、啼せてなき顔、ありかせて歩ぶり、（中略）妾は、風俗鑑にかきたればくどし。又いづくえ行ても、えんごをなる女は、ふるひもく、うすぐろくしめりたるかつぎに、脛高にかゝえ帯して、彼かゝにつれありかれて、諸人に面をさらす事、迷途罪人が中有の道すがら、七日くになわたさるゝも、是にはいかゞと哀也。

とある。両作品が使われている文言は一致しているとはい難い。しかし、『都風俗鑑』の傍線部①と②、『好色訓蒙図彙』の①で示されているように、両作品では、いづれも都の女性は奉公先に気に入つてもらうため、借小袖を借りたり、駕籠かきや下女などを雇つたりしている。また先方側のご機嫌を取るため、『都風俗鑑』の「笑はせて笑顔を見、立たせては姿、歩きぶり」と『好色訓蒙図彙』の「わらはせて笑顔、啼かせてなき顔、ありかせて歩ぶり」は、文章表現が類似している上に、両方とも先方側からどんな芸を要求されてもそれに従つてしまふという都の女性たちの真剣さを活写している。結婚相手が見つからず独身の当時の女性に関して、『都風俗鑑』の③にも『好色訓蒙図彙』の②にも、人目に晒されても、引つ切り無しに面接を受け続けなければならぬ哀れな実態が描かれている。

『好色訓蒙図彙』に見られる「妾は、風俗鑑にかきたればくどし」についても少し触れてみたい。もし『好色訓蒙図彙』と『都風俗鑑』が同じく山雲子の手による作である場合、「妾は、風俗鑑にかきたればくどし」とは『好色訓蒙図彙』が『都風俗鑑』より後に成立したことから、作者が『都風俗鑑』を念頭に置きながら書いた都の風俗本の追加版ということになる。それについてまた結論のところでも言及したい。

『都風俗鑑』の巻二一四「女を仕立てる手入并奉公の品」において、奉公女の親が

いかにして自分の娘をより高い金額で売り込むための様子が記されている。

さもあさましき和郎、娘にかゝりてよき元手を得て、楽しくなるもあれば、ましてともかうも世を渡る者の子に、少しも渋剥けたるあれば、彼女にかゝらん事を願ひて、ひたすら吾仏と育てなし、読物、手書事を教ゆるもあり、琴、三味線を習いするもあり。

その必死な有様は『好色貝合』の「浮女」にも見受けられる。『好色貝合』の「浮女」において、

氏よりそだちじやとは、都女の風俗の事成べし。分際不相応に女をそだてなし、万存在也。母の親が、下女役をし、女を上におしなをし。親はかたすそそろはひでも。女に花をかざらすは。色を本手のしかけのてだて。

『都風俗鑑』では、親が「ひたすら吾仏と育てなし」と、娘を生活の頼りとすべく大切に、あらゆる手を使って育てようとする。『好色貝合』においては、「母の親が、下女役をし、女を上におしなをし。親はかたすそそろはひでも。女に花をかざらすは」と、親が下女の役をして、服が破損しても気にせず娘を「分不相応の女」に育成しようとする。その必死さは『都風俗鑑』の親の様子と一致しているといえよう。

最後に、『都風俗鑑』の巻四——「茶屋女の風俗」について触れておこう。その描写については、『好色訓蒙図彙』と共通しているように思われる。

『都風俗鑑』では、

そのふつゝかなる風俗をいはず、酒二三度に廻れば、彼女勝手へ立ちて茶をとて来るなり。何の応答へもなく屏風引き廻して、自ら内に入り、帯解きふためきて、「おやすみなされませひ」といふ有様、雨を催す雲の如くいと慌し。何とぞかゝる座配には分もあるべき事なれども、たゞ客の数を好む故、とかく座配の興をば辿らず、其諸分を思へば雷光の如し。

とある。一方、『好色訓蒙図彙』では「茶屋」について、

酒めぐれば、間を直しにたつ、初のさけと後のとは、ぎやうさんくらははれず、心をつくればいきち、さてもむさし。床入あはたしく、屏風、たゞみ、むしろあげて、指さきばかりをすゞぎて、片手に間鍋、片手に茶をくみてくる、又酒のめば、ひた物茶をくみにたつ、茶碗立ながらさし出し、行燈ひきよせて、指にてかきたて、其指をあたまににじる、客たてば、菓罐をかたてにさげて、せどをさしてはしるは。どこぞあらふと見えたり、

とある。傍線部について、『好色訓蒙図彙』では『都風俗鑑』と異なる表現を使つ

て茶屋の風俗を描いているが、その内容について、たとえば、『都風俗鑑』の「酒二三度に廻れば、彼女勝手へ立ちて茶をとて来るなり」と『好色訓蒙図彙』の「又酒のめば、ひた物茶をくみにたつ」と、いずれも客がお酒を何度か飲んだ後、茶屋女がお茶を入れる様子を描いている。また、茶屋女の床入りの様子について、『都風俗鑑』では、作者の評は「雨を催す雲の如くいと慌し」であるのに対して、『好色訓蒙図彙』は「床入あはたしく」と『都風俗鑑』と同様に茶屋女の床入り姿を無風流な、慌しく落ち着きのない姿としている。

以上、『都風俗鑑』と『好色訓蒙図彙』『好色貝合』の風俗描写における関連について論じてきた。前節において、『都風俗鑑』と『朱雀遠目鏡』、また『朱雀諸分鑑』と『好色貝合』の遊興論における近似性について検討した。これらの結果、『都風俗鑑』の三部作と『好色訓蒙図彙』『好色貝合』の内容・表現の共通性から、『都風俗鑑』の三部作は同じ作者であること、またその作者と『好色訓蒙図彙』『好色貝合』とは同じように山雲子の可能性が高まったと考えられる。次節においては、さらに三部作の署名と山雲子の作品のそれとを合わせて検討し、その作者は山雲子である可能性をより究めたい。

三 署名について

前節において、『都風俗鑑』をはじめとする三部作は内容的に山雲子作の『好色訓蒙図彙』『好色貝合』と非常に似ているため、三作とも山雲子の著述である可能性について言及した。本節では、さらに三部作の署名を検討し、その署名と山雲子の署名の関わりについて掘り下げてみたい。

『朱雀遠目鏡』は署名が見られず、『都風俗鑑』の署名は前掲木村氏の論にも述べられているように、「花洛の遊民何之何氏」と「序」に見え、『朱雀諸分鑑』の署名は「跋」に「朱雀野人」とある。三部作が世に出た延宝九年（一六八一）前後より、『好色訓蒙図彙』『好色貝合』『人倫糸屑』が刊行された貞享五年（一六八八）までの山雲子の著作に見られる署名（三部作の署名と関係あるもののみ）を表に纏めてみた。

次の表は『朱雀遠目鏡』『都風俗鑑』『朱雀諸分鑑』及び筆者が山雲子作と詳らかにした『名女情比』『好色袖鑑』『男色十寸鏡』（表中の*）、塩村氏により山雲子作と認定された『好色訓蒙図彙』『好色貝合』『人倫糸屑』に、山雲子の署名があつて彼の作が明らかである二点（表中の◎）を加えて一覧にしたものである。

左の表を見ると、『都風俗鑑』の「何之何氏」は山雲子の実名入り作品である『軽口大わらひ』の「何の何氏」と『好色袖鑑』の「何の何氏」「好色貝合」の「何之何氏」と酷似している。加えて、『朱雀諸分鑑』の「朱雀野人」も『好色訓蒙図彙』の「洛

書名	署名	出版年（成立年）	書肆
◎軽口大わらひ	何の何氏／山雲子記	延宝八年正月	小林久左衛門・大角八郎兵衛
*名女情比	落葉堂の好色軒	延宝九年正月	瀬尾源兵衛・本田次兵衛
朱雀遠目鏡	署名記載なし	延宝九年正月	版元記載なし
都風俗鑑	花洛の遊民何の何氏	延宝九年三月	版元記載なし
朱雀諸分鑑	朱雀野人	延宝九年四月	丸屋源兵衛・萬屋庄兵衛
*好色袖鑑	花洛の好色堂にして何の何氏	天和二年二月	丸屋源兵衛
◎書札初心抄	洛之散人山雲子	天和二年九月	丸屋源兵衛
好色訓蒙図彙	洛下の野人作書無色軒三白居士	貞享三年閏三月	銅駝坊三右衛門・高辻昌陽軒
*男色十寸鏡	洛陽之野人	貞享四年七月成立	金屋平兵衛か
好色貝合	洛下散人何の何氏謹撰	貞享四年九月	清兵衛・三右衛門
人倫糸屑	洛下之野人撰	貞享五年四月（序文による）	大坂深江屋太郎兵衛

下の野人」と『人倫糸屑』の「洛下之野人」などと類似しているように思われる。

『都風俗鑑』の署名「花洛の遊民」について少し検討を加える。「遊民」は『日本国語大辞典』¹⁾に拠ると、「定まった職業を持たず、仕事もしないで遊んでいる人。のらくら者。また、世俗を離れて人生の楽しみを追う人をさしてもいう」と定義されている。また、『朱雀諸分鑑』の「朱雀野人」の「野人」は、『日本国語大辞典』についても、同辞典では、「在野の人。民間の人」とされている。『好色貝合』の「洛下散人」の「散人」も、「俗世間を離れて気ままに暮らす人。また、官途につかない人。閑人。散士」と解釈されている。塩村耕氏の論によると、もと武士だった山雲子は寛文二年（二六六二）養父が逃げたことをすぐに藩に届けなかったことを理由に改易された。言い換えれば、山雲子は寛文二年以降武士の身分を失くし、職業を持たない浪人に転落し在野の人間になったといえる。そう考えると、この時期の山雲子の著作に頻出する「散人」、「野人」のような署名はいずれも彼の浪人の身分を暗示しているように考えられる。同時に、堅苦しい武士身分から解放された、在野人間としての山雲子の心境的な余裕を示しているようにも思える。したがって、『都風俗鑑』の署名「花洛の遊民」も『朱雀諸分鑑』の「朱雀野人」も山雲子のような在野の人間を暗示する署名ではないか。

四 結語

以上、『朱雀遠目鏡』『都風俗鑑』『朱雀諸分鑑』と『好色訓蒙図彙』『好色貝合』との遊興論や風俗描写の関連性、文章表現の類似性について検討を加えてきた。『都風俗鑑』をはじめとする遊女評判記の三部作は、内容といい、文章表現といい、山雲子作の『好色訓蒙図彙』『好色貝合』と深く関わっていることがわかった。加えて、『都風俗鑑』『朱雀諸分鑑』の署名、及び山雲子作に見られる署名を合わせて見比べてみた結果、『都風俗鑑』『朱雀諸分鑑』の署名「花洛の遊民何之何氏」と『朱雀諸分鑑』の「朱雀野人」は山雲子のこの時期の署名の傾向と一致していることも判明した。無論『好色訓蒙図彙』『好色貝合』に見られる、『都風俗鑑』の三部作との類似は『好色訓蒙図彙』『好色貝合』の作者による模倣である可能性も否定できない。しかし、その内容の共通性及び山雲子のほかの作品の署名の仕方を合わせて考えれば、この三部作は山雲子の手による可能性があると考えられる。

山雲子が延宝九年（一六八一）に『朱雀遠目鏡』、『都風俗鑑』、『朱雀諸分鑑』のよ

うな、当時の遊女や私娼などの風俗を記した本を世に出した後、どうしてまた貞享三年（一六八六）以後、好色本の三部作『好色訓蒙図彙』『好色貝合』『人倫糸屑』を著したのか。

『都風俗鑑』より後に成立した『好色訓蒙図彙』は作者が『都風俗鑑』を意識しながら書いた増補本である可能性について先に述べた。しかし、『好色訓蒙図彙』のみならず、『好色貝合』『人倫糸屑』もまた『都風俗鑑』から影響を受けている。このように見てくると、山雲子が『都風俗鑑』で詳しく述べられなかったこと、たとえば「人置嬬」や「手掛狂い」のように、『都風俗鑑』では言葉のみ登場する職業や好色の様子を『好色訓蒙図彙』『好色貝合』『人倫糸屑』では項目を立てて、増補の形でさらにその内容を細かく紹介したのではないかと思われる。

ついでに言うと、山雲子が自分の著作において以前に書いた著作について言及したのは、ほかにも例が見られる。天和三年（一六八三）刊『和歌詞林抄』では、『伊勢物語』四十九段の歌「¹¹初草のなごめづらしき言の葉ぞうらなく物を思ける哉」について注釈を施し、最後のところ、

業平妹のやさしき姿を見て哥に

うらわかみねよけにみゆる若草を

人のむすはん事おしそ思ふ

といへる返哥也伊勢物語抄に委し

と、「うらわかみねよけにみゆる若草を人のむすはん事おしそ思ふ」の解釈を含めて詳しいことは「伊勢物語抄」を併せて見ると良いという。傍線部にあるように、その表現は実に『好色訓蒙図彙』の「委は、風俗鑑にかきたればくどし」と類似しているのではないか。ここに見られる「伊勢物語抄」は恐らく彼が延宝二年（一六七四）に著わした『（頭書／新抄）伊勢物語』のことであろう。

もし以上の仮説が成立したなら、山雲子は延宝九年（一六八二）に『名女情比』のみならず、『都風俗鑑』『朱雀遠目鏡』『朱雀諸分鑑』の三部作を立て続けに著わすことになる。また、前掲の拙稿「山雲子の著作について」において、筆者は好色的な要素を持つ延宝八年『軽口大わらひ』から、貞享五年の『人倫糸屑』までの八年間、山雲子が八作の好色本を世に出したと述べたが、もし本論で言及した『都風俗鑑』『朱雀遠目鏡』『朱雀諸分鑑』をも入れると、彼の好色本は十一作となる。今後さらに山雲子の知られざる作品を見つけ出し、彼の風俗本作家としての一面をより浮き彫りにしたい。

【註】

- (1) 「山雲子の著作について」『近世文芸』九九号（日本近世文学会・二〇一四）。
- (2) 江本裕「好色一代女」と風俗書『西鶴研究—小説編—』（新典社・二〇〇五）。
- (3) 木村仙秀「稀書複製刊行稀書解説」第十篇（米山堂・一九三八）。
- (4) 塩村耕「西鶴同時代の隠者作家 山雲子の新たに判明した著述」『日本古書通信』（第九六三号・日本古書通信社・二〇〇九・十月号）。
- (5) 以下、『朱雀遠目鏡』に関する引用は、松田修・森谷尅久・吉田光邦責任編集『日本庶民文化史料集成』第九巻・遊び（三一書房・一九七四）に拠った。
- (6) 以下、『都風俗鑑』に関する引用は、渡辺守邦・渡辺憲司校注『仮名草子集』新日本古典文学大系七四（岩波書店・一九九一）に拠った。
- (7) 朝倉治彦編「解説」『未刊仮名草子集と研究（一）』（未刊国文資料刊行会・一九六〇）。引用文に見られる鉤括弧や二重鉤括弧は原文のままである。また、文中に「筆をとり侍ぬ」とあるが、正しくは、「筆を綫とり侍ぬ」であり、「朱雀諸分鑑」を問とあるが、問は「問」の誤りである。
- (8) 以下、『朱雀諸分鑑』に関する引用文は、『新編稀書複製会叢書』二五巻（臨川書店・一九九〇）を適宜に翻刻したものである。
- (9) 以下、『好色貝合』に関する引用は、吉田幸一編『好色物草子集』（古典文庫、一九六八）に拠った。
- (10) 以下、『好色訓蒙図彙』に関する引用は、吉田幸一編『好色物草子集』（古典文庫、一九六八）に拠った。
- (11) 『日本国語大辞典』第二版（小学館・二〇〇〇）。
- (12) 塩村耕「俗学者、山雲子坂内直頼の伝について」『近世前期文学研究—伝記・書誌・出版—』（近世文学研究叢書十六・若草書房・二〇〇四）。
- (13) 本稿では、紙幅の都合上『人倫糸屑』と『都風俗鑑』『朱雀遠目鏡』『朱雀諸分鑑』との関わりについて触れないことにする。
- (14) 以下、『伊勢物語』に関する引用は、『竹取物語・伊勢物語』新日本古典学大系十七（岩波書店・一九九七）による。
- (15) 以下、『和歌詞林抄』に関する引用は、国文学研究資料館蔵本（文化八年写本）による。

Sanunshi and Yūjohyōbanki

CHEN Yi-Shiu

Abstract

Sanunshi is one of the important 17th century authors in Japan. He is known as an annotator of classical literature and an author of enlightening books as well.

Miyako Fūzokukagami, Shujaka Tōmegane, and Shujaka Showakekagami are Yūjohyōbanki, a book of commentary on prostitutes, written anonymous in 1681 in Kyoto.

In the present study, I have analyzed two works, Kōshoku Kimmōzui and Kōshoku Kaiawase, which are written by Sanunshi, with Miyako Fūzokukagami, Shujaka Tōmegane, and Shujaka Showakekagami to determine if these three works are also made by Sanunshi.

Through this study, I clarified his other face as an author of erotic literature, and hope to discover more of Sanunshi's pieces which are anonymous to evaluate his writer image.

Keywords: Sanunshi, Yūjohyōbanki, Miyako Fūzokukagami, Shujaka Tōmegane, Shujaka Showakekagami